鳥羽離宮跡発掘調査概報

平成５年度

京　都　市　文　化　観　光　局

序

京都は，恵まれた自然環境の中で幾多の歳月と歴史を積み重ねて，今年建都1200年という輝かしい節目を迎えました。

平安京の造営以来，常に日本文化の先導的な役割を果たすべく，限り無い創造を続けてまいりました先人の足跡を示す多くの文化遺産は，時代の変貌により今は地上から姿を消して，埋蔵文化財として地中に深く眠っています。

しかし，この貴重な埋蔵文化財も最近の著しい都市の開発に伴い，重大な危機を迎えようとしています。

私達の先人が残した，かけがえのない価値を持った埋蔵文化財を，できるだけ保存して現在の生活の中に活用し，後世の人に伝えることが，現代に生きている私達に課せられた大切な責務であると考えています。

本書は，京都市が平成５年度に文化庁の国庫補助を得て実施した，埋蔵文化財調査の概要報告書であります。

立会調査，発掘調査につきましては，本市が㈶京都市埋蔵文化財研究所に委託したものであり，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施したものであります。

終わりに，発掘調査にご協力いただいた市民の方々及びご指導・ご助言をいただいた関係者の方々に心から感謝いたしますとともに，本報告書が少しでも京都の歴史を知るための資料として皆様のお役にたてれば幸いと存じます。

平成６年３月

京都市文化観光局

例　　言

1　本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した文化庁国庫補助による平成５年度の鳥羽離宮跡発掘調査の概要報告である。

2　調査地点は下記のとおりである。

京都市伏見区竹田淨菩提院町41-7番地

3　発掘調査は、鈴木久男、前田義明、東　洋一が実施した。

4　本書の執筆・編集は、鈴木久男が担当した。

5　写真撮影は村井伸也が担当し、幸明綾子が協力した。

6　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。測量点の設置は、辻　純一、宮原健吾が行った。

7　本書で使用した方位、座標の数値は平面直角座標系VIによる。座標の数値はｍ単位である。標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）による。

8　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図「城南宮」（縮尺１/2500）を複製し調整した。

9　本書の土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。

10　図版３・４に掲載した写真は、鳥羽離宮跡調査研究所から拝借したものを使用した。

本　文　目　次

139次調査 …… 1

1　調査経過…… 1

2　遺構・遺物…… 2

3　ま　と　め…… 3

東殿の庭園遺構について …… 4

1　はじめに…… 4

2　調査の概要…… 4

3　遺構の概要…… 6

4　庭園遺構の特徴…… 7

5　ま　と　め…… 8

図　版　目　次

図版一　遺跡　鳥羽離宮跡全体図

図版二　遺跡　東殿跡庭園遺構配置図

図版三　遺跡　1 東殿跡航空写真（1978年度撮影）（南西から）

2 第139次調査区全景（東から）

図版四　遺跡　1 第10次調査　検出した景石（南西から）

2 第11次調査　3個並んだ景石と洲浜（南西から）

図版五　遺跡　1 第11次調査　遣水の注ぎ口（北から）

2 第11次調査　遣水と出島の南端（北から）

3 第11次調査　出島南端の汀（東から）

図版六　遺跡　1 第11次調査　洲浜の細部（西から）
2 第41次調査　半島の洲浜（北から）
3 第44次調査　景石検出状況（西から）
図版七　遺跡　1 第86次調査　汀の地業（北東から）
2 第86次調査　汀の洲浜と排水溝（東から）
図版八　遺跡　1 第112次調査　池北岸の状況（西から）
2 第112次調査　岸に集められた玉石（東から）
3 第112次調査　近衛天皇陵の南西の堤（南から）
図版九　遺跡　1 第112次調査　池の北岸と南北溝（東から）
2 第134次調査　復元した水位（西から）
図版一〇　遺跡　1 第112（B）調査　出島東側の汀（北から）
2 第117次調査　出島西側の洲浜と景石（北東から）

挿　図　目　次

図1　調査位置図……1
図2　南壁断面図……2
図3　遺構実測図……2
図4　仏　像　片……3
図5　仏像片実測図……3

表　目　次

表1　東殿跡庭園遺構の調査一覧……3

第139次調査

1　調査経過

調査地は、東殿跡の南半部に位置する。今回の調査は、当該地に民家新築の工事計画が提出されたため工事に先だって実施した。周辺部の調査では、東殿に営まれた庭園遺構を検出している。第11次調査や第86次調査では、池の汀と玉石敷きの洲浜を発見している。

調査地は、第11次調査地の西端部にあたり、池の汀が検出される場所に相当する。このため、調査区を少しでも広く確保するために調査中の土はすべて場外へ搬出した。この付近は、土地区画整理の際に厚く土盛りが行われているため重機を導入して掘り下げを実施した。

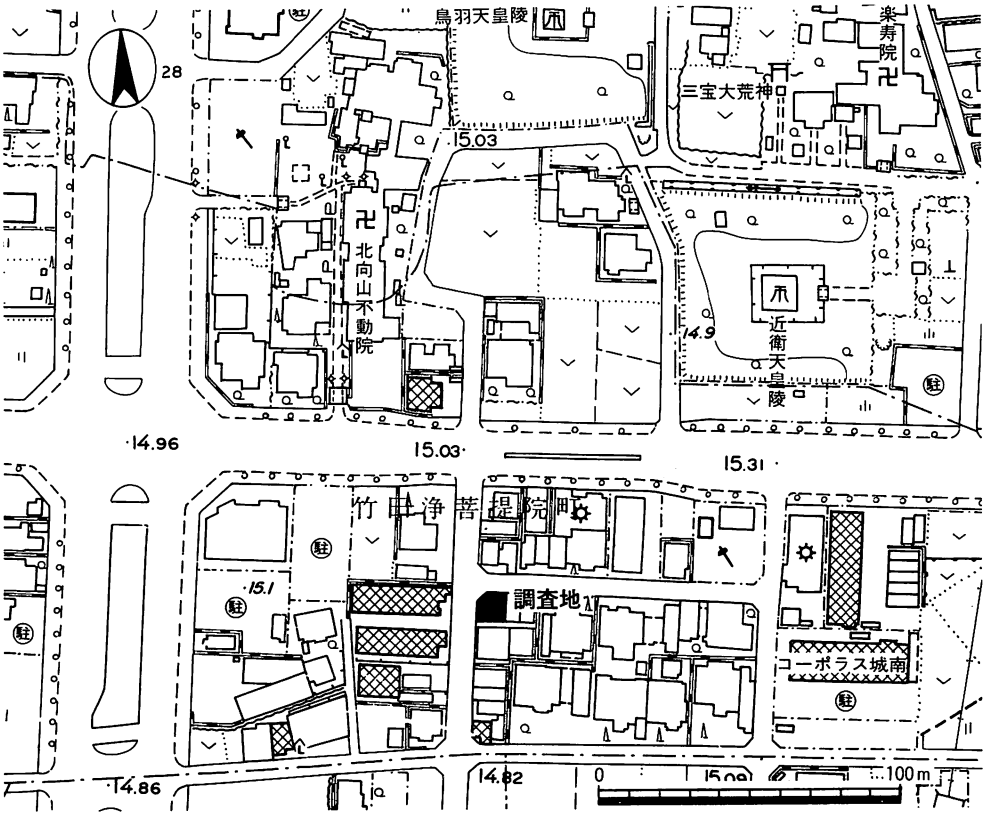


図1　調査位置図

2　遺構・遺物

調査の結果、池の南岸の一部と洲浜の一角を確認した。調査区の基本層位は次の様であった。盛土は地表下170cmまで見られ、その下は褐色腐植土が20cmほど認められた。旧耕土はいっさい見られず盛土の際に取り除かれたものと考えられる。褐色腐植土の下には、松毬などを含む暗褐色腐植土が30cmほど堆積していた。この腐植土は、池が苑池として機能しなくなった後のものである。その下層には、黄灰色粘土が25cm、そのさらに下層には灰色砂が認められた。検出した遺構は、先述したように池の南岸に作られた洲浜の一部である。ただし、洲浜の本体は今回実施した調査区のすぐ南側である。

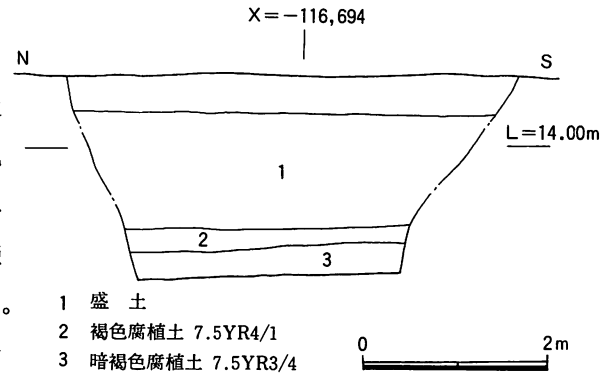


図２　東壁断面図

遺物は、暗褐色腐植土から土師器、瓦、木製品などが出土したが点数は極めて少なかっ

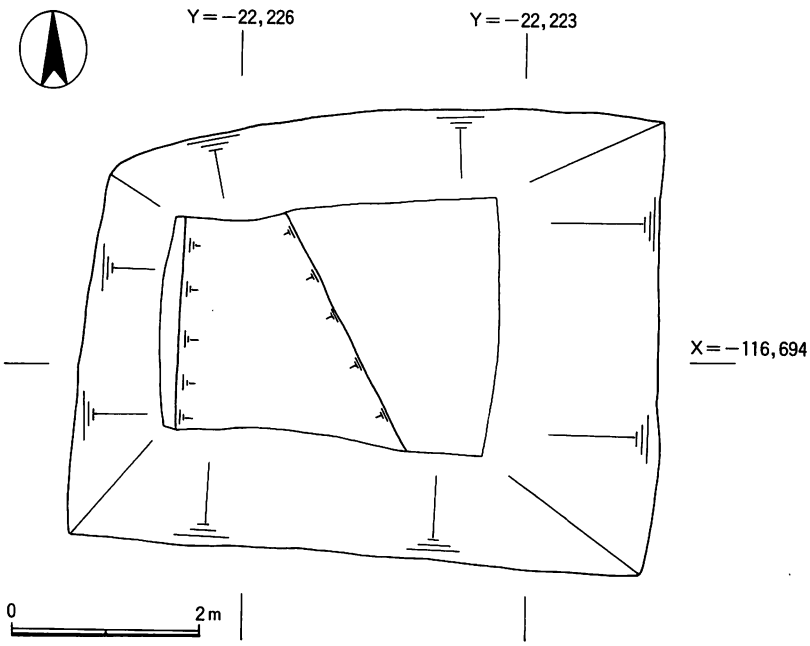


図３　遺構実測図

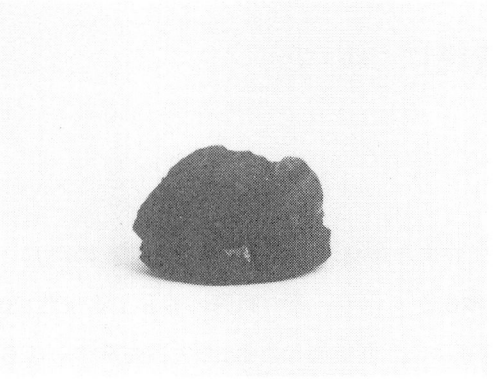


図４　仏像片

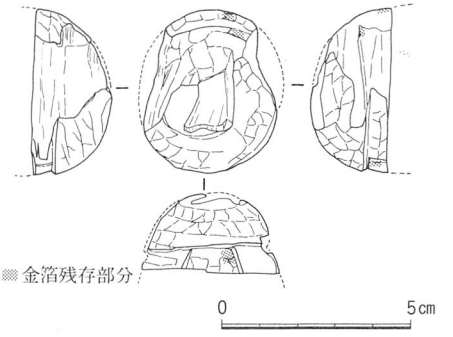


図５　仏像片実測図

た。土師器は、12世紀中頃に比定される皿が出土しているが小片である。瓦は丸瓦が２点ほど出土しているが、これも小片である。木製品のなかに、彫刻を施し金箔をとどめた物が見られる。これは仏像の一部と考えられる。その他には、建築部材ではないかと思われる木製品もあるが旧状をとどめていない。

３　ま と め

今回の調査によって、東殿に造営された苑池の南岸をほぼ明らかにすることができた。また、1971年度（昭和48）に実施した第11次調査の測量成果に、現在用いている基準点測量から得た国土座標を結び付けることが出来るようになり、既往の鳥羽離宮跡発掘調査を一つにまとめることが可能となった。

表１　東殿跡庭園遺構の調査一覧

調査次数	所　在　地	遺　　跡	調査年度
第10次	伏見区竹田淨菩提院町73-2,73-3,地先	池の西岸と景石	1972年
第11次	伏見区竹田淨菩提院町一帯	池の南岸と洲浜、遣水、木株	1973年
第41次	伏見区竹田淨菩提院町57	池の汀と洲浜	1978年
第44次	伏見区竹田淨菩提院町31	池、景石、近衛天皇陵南辺の堤	1979年
第58次	伏見区竹田淨菩提院町52-1	南北溝	1980年
第112(A)次 (B)次	伏見区竹田淨菩提院町56、58-1 伏見区竹田淨菩提院町68	池の北岸と近衛天皇陵の西辺堤 出島の東面	1985年
第117次	伏見区竹田淨菩提院町32	出島西面の汀と洲浜、景石	1986年
第126次	伏見区竹田淨菩提院町60-2	広場跡	1987年
第129次	伏見区竹田淨菩提院町128-1	近衛天皇陵の南辺堀と南東隅	1988年
第134次	伏見区竹田淨菩提院町60-1	池北西岸と洲浜	1989年
第139次	伏見区竹田淨菩提院町41-7	池の南岸	1993年

※第10・11次調査は、鳥羽離宮跡調査研究所が京都市文化観光局から委託を受けて実施した。
第41次調査以降は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市文化観光局から委託を受けて実施した。

東殿の庭園遺構について

1　はじめに

東殿の庭園遺構は、安楽寿院境内の一角に所在する鳥羽天皇陵（安楽寿院陵）の南方、近衛天皇陵（安楽寿院南陵）の西方において検出している。その範囲はおおよそ東西170ｍ、南北約150ｍに及んでいる。庭園遺構の調査は、今回実施した第139次調査を含めて過去12次にわたっている。こうした調査によって、概ねその規模や実態などをうかがい知ることができるようになってきた。しかしながら調査が断続的であり、かつその概要報告も各年度ごとに個別であった。このため、その一連の調査成果についてはあまり知られていない。

ここでは、現在までに東殿で行った庭園遺構の発掘調査をふりかえりながら、その状況を見てみよう。

2　調査の概要

東殿で庭園遺構を初めて発見したのは、1972年度（昭和47）に実施した第10次調査である。この時に検出した遺構は、池の東西両岸と景石などである。景石は池の西岸部において２箇所ほどで発見した。石の据付方法や大きさは異なっていた。このおり、池の西方で検出した玉石を積み上げて突堤状にした遺構は、鳥羽離宮造営以前に設けられたと推定された。

翌、1973年度に（昭和48）実施した第11次調査では、先に検出した池の南岸東半をほぼ調査することができた。この調査では、洲浜・遣水・景石・野筋や木の株などを検出している。池の汀で発見した洲浜は、拳大の玉石を用いて１ｍから1.5ｍ幅に仕上げていた。遣水は、池の南東部にあり池への水は東側を流れる溝から導入していた。一方、景石はいずれも池の汀に据えられていた。また、汀近くには木の株が数箇所に見られ、調査者はその木の株の樹種を楓・桜・松と考えられた。発見当初、平安時代のこのような庭園遺構の調査は、平安京はもとより、他の遺跡においても例はなく極めて貴重なものであった。

1978年度（昭和53）に実施した第41次調査では、南から北へ傾斜する汀と洲浜を確認した。この状況は、池西岸の一部が東へ半島状に伸びていることを物語るものであった。

また同年、近衛天皇陵の南隣で行った第44次調査では、東西方向に並ぶ石列と景石、それに堤状の遺構を発見した。この時検出した景石の中に、長さ１ｍ前後の緑色片岩が数個含まれていた。緑色片岩の搬入時期について再考する資料となった。ただし、石列や堤状の遺構の解釈についてはこの調査の段階では明らかでなかった。

1980年度（昭和55）に行った第58次調査では、池の北東に設けられた南北方向の素掘りの溝や木の株を検出したが、建物遺構などは見られなかった。こうした状況から、池の北側は建物などを建てない広場であったと推定した。

1983年度（昭和58）に実施した第86次調査では、池南西部の一角を明らかにした。検出したのは汀、洲浜、景石、溝などである。この付近の汀もまた緩やかで、玉石の洲浜を設けていた。洲浜上には、やや先の尖った景石を据え付けていた。溝は南北方向の素掘で、土留めをした痕跡は見られなかった。この調査で注目されたのは、検出した池岸はすべて人工的な土盛りによって形作られていたことである。土盛りは、計画なしに実施したのではなく、区画された一定の単位ごとに行われていた。

そして、1985年度（昭和60）の第110次調査によってさらにその実態が明らかになった。この調査は、第９・10次調査地を再調査したものである。その結果、玉石を用いて突堤状に積み上げた遺構は、金剛心院の釈迦堂や九体阿弥陀堂の建物地業と同様の掘込地業の一工法であったことが明らかになった。また、その実施時期は出土した土師器から12世紀前半であることもつきとめた。

一方、同じ年に実施した第112次調査や第117次では、池の北東岸ならびに出島や近衛天皇陵に関係する遺構を発見した。東殿の池に出島の存在が確認されたのは初めてのことである。その結果、第11次調査で発見した半島状の遺構は、北岸と同様岸と出島を繋ぐ高まりであったことが判明した。北岸から出島西側の汀には玉石の洲浜が見受けられた。これに対し、出島の東面汀には一切洲浜は認められなかった。また、出島東側の池には、近衛天皇陵の区画を示す幅６ｍの堤が池を埋め立てて設けられていた。第117次調査では、出島の西面に景石が据え付けられているのを発見した。

1988年度（昭和63）に実施した第126次調査では、第58次調査と同様遺構は見当たらず池の北側は広場として使用されていたことを再確認し、またこの付近がかなりの規模で整地されていたことがわかった。そして、1989年度（平成元）には、第126次調査地のすぐ南側で第134次調査を行い池の北端を明らかにした。ここでも、汀に玉石を用いた洲浜が見られ、庭園を設けた際の大規模整地を確認している。この整地層の下から、11世紀後半の遺

物を出土する流路を発見している。ところで、1985年度（昭和60）に行った下水道工事の立会調査では、第134次調査区のすぐ南側において平安時代後期の井戸を洲浜の間近で発見している。

以上が、東殿の庭園遺構を調査した成果の概要である。一部の地区を除きこれらの庭園遺構は、土地所有者の協力を得て現地保存されている。

3　遺構の概要

次に、検出した遺構についてその特徴を述べてみよう。

池　規模は概ね東西170m、南北もほぼ170m前後である。池の水位は、海抜13.2mから13.5m、水深は0.5mから0.6mを測る。北岸・東岸・南岸の汀線は、出入りが少なく緩やかな曲線を描いているのに対し、西岸部には東へ張り出す半島が見られる。汀の勾配は、場所を問わず極めてなだらかな傾斜である。島は、北岸および南岸から伸びる陸とつながっている。このため池は、東西に2分された形になっている。

池の堆積土は上下2層に分層でき、上層には室町から桃山時代の遺物が含まれ、下層からは平安時代後期の遺物が出土する。

洲浜　拳大の玉石を用いて幅1mから1.5mの洲浜を形作っている。洲浜の検出状況は、玉石を汀に「敷き詰める」と言うより「撒いた」と表現した方が適切かもしれない。こうした状況は、洲浜の設けられている高さの土質が砂層のため、波によって影響された結果である可能性もあるが即断しがたい。玉石は、建物地業に用いられているものと粒や石質は同じである。

出島から東側の汀では洲浜を検出していないが、その反対側の第112次調査では、玉石を集めた所を2箇所発見している。検出したのは、近衛天皇陵と池を区画する堤の中と、北岸を南北に流れる溝が池に注ぐ口である。その場所は特に玉石を必要とする所でもないし、池の景観に必要な場所とは考えられない。また、そこに集められていた玉石は、洲浜に使用されているものと同質であり、大きさもほとんど同じで粒も揃っていた。

出島　島の全容が明らかでないため、正確な規模は不明であるが概ね南北40m、東西35m前後と推定している。島の一番高い所と池底との高低差は約0.9m、池の水位との差は0.4m前後と考えられる。島は全体が砂質土で形成されている。断ち割り調査の結果、島は基本的に人工的な盛り土によって構築されたのではなく、池を掘り下げる際にその部分だけ掘り残したものであることが確かめられた。島の西面において発見した景石は、いずれも

１ｍ以下と小振りであった。

遣水　西側の池の南東部において検出している。流れの幅は、池に近づくにしたがって広くなり、池に注ぐ手前で急に広がって幅４ｍとなっている。また、その部分の両岸は池と同様の玉石を用いて洲浜としている。流れ本来の幅は１ｍ前後で、底や岸には玉石などを使用しない小川状の遣水であったと思われる。水の引き込みは、東殿を東から西南へ流れる幅６ｍの水路を利用している。

排水溝　西側の池の南西で検出した幅1.5ｍ、深さ0.4ｍの素掘の溝をそれと考えている。池との接続部分が未調査のため、水位の調整や施設の有無など不明である。東側の池にもこのような施設はあったはずであるが今のところ明らかではない。

景石　景石は、汀からやや上がった陸部や洲浜上に据え付けられている。それ以外の場所に据え付けられていた例は今のところ見当たらない。景石は数個の石を組合せる時と、単独の場合とが見受けられる。数個の場合でも、荒磯風の石組にはせず穏やかな姿に据え付けている。景石として用いられている石は、チャート、砂岩、脈石英、緑色片岩などがある。

半島　実態はほとんど明らかではないが、西岸のほぼ中央部で検出している洲浜や景石などからその存在を考えている。

植物　庭園の四季を彩った樹木や草などについては、池内堆積土に含まれている種子や葉、枝、それに木の株などから明らかにしている。主な種類を列記してみると、木本では、桜・センダン・カジノキ・松・梅・カエデ、草本ではヒメビシ・オモダカ・マツモ・タガラシなどが見られる。

4　庭園遺構の特徴

東殿に造営された庭園の特徴をあげてみよう。

1）池は他の殿舎に設けられた池につながることなく、東殿だけで完結する。

2）池の水位は季節によって変化していたと思われるが、洲浜の高さから海抜13.2ｍから13.6ｍ前後と推定している。この水位は南殿・北殿・金剛心院などの池より１ｍほど高い。

3）池の水は遣水などから一部導入されていたが、基本的には池底からの湧水にたよっていた。

4）池は出島によって東西に二分されるが、規模は西側の方が広く作られている。

5）出島から東側の池には洲浜を見ることができないが、この様な状況は庭園を造営した当初からの姿とは考えられない。こうした状況が生まれた背景は、池の一角が近衛天皇陵となった時に、洲浜の玉石を取り除いたのではないかと考える。

6）池の景観は、緩やかな汀に設けられた玉石の洲浜と、要所に据えられた景石からなる穏やかなもので、荒々しい石組などは見られない。

7）出島を作る工法は、「作庭記」に記されている内容と同様、池を掘り下げる際に島の形に掘り残したものである。

8）池の西側には、九体阿弥陀堂や不動堂などの建物が建てられていたものと考えられる。

9）この付近が庭園となる以前には、腐植土が堆積するような池があったり、北東から南西へ流れる流路などもあった。この時の池が人為的であったかどうかについては不明である。

10）池の西岸および南岸は、人工的に土盛りされて形作られたものである。

5　まとめ

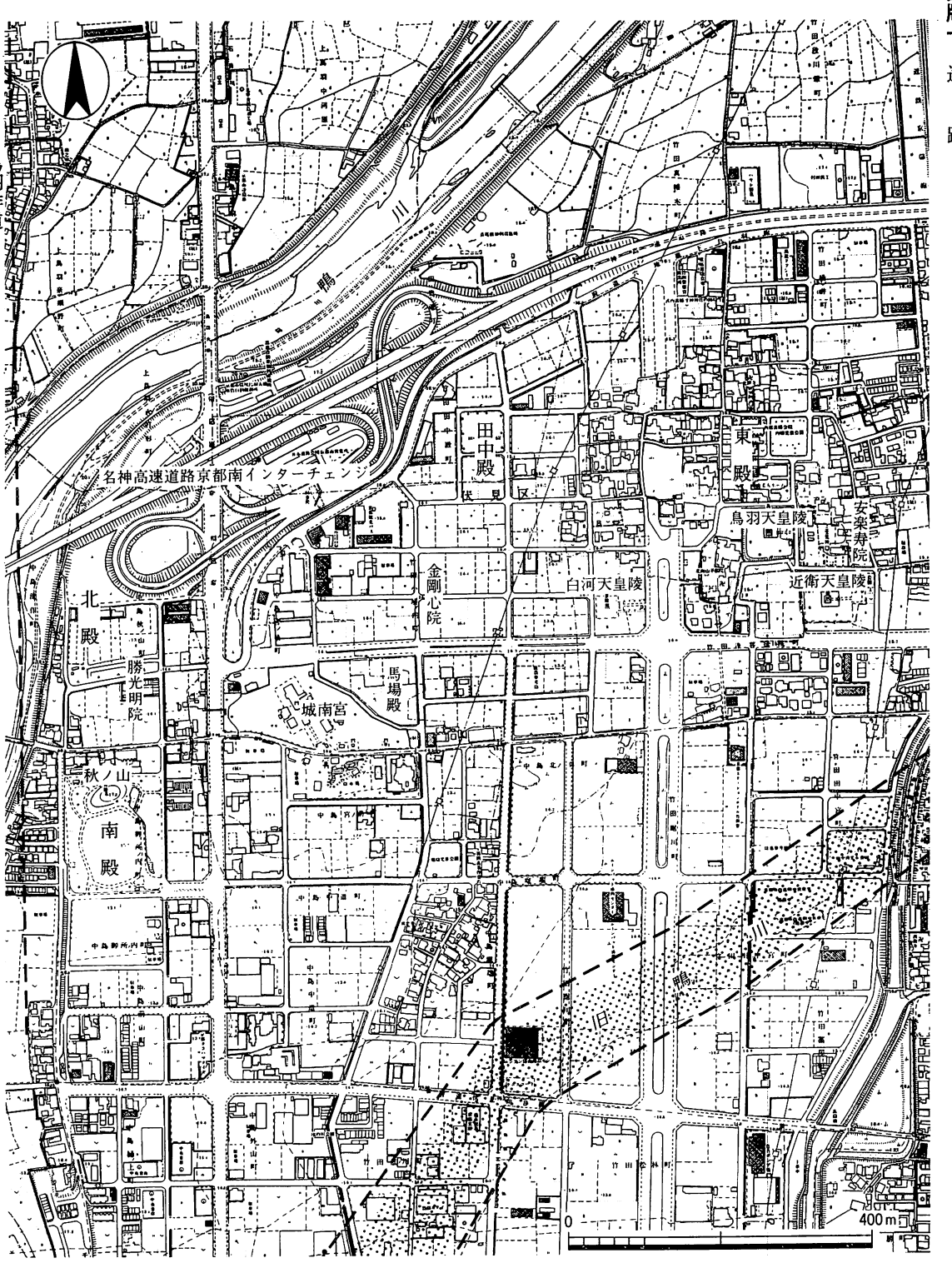
東殿の南側に設けられた庭園は、いつ頃に造営されたのであろうか。それを探る手がかりとして第110次調査が上げられる。この調査では、玉石を用いた地業の下層で検出した腐植土層から12世紀前半の瓦器が、また舌状遺構からも同時代の土師器が出土している。一方、第134次調査では、汀の洲浜下層において、北東から南西方向の幅４ｍ以上、深さ１ｍ以上ある流路を発見している。流路内の埋土からは、11世紀後半の土師器が出土している。こうした状況から、東殿に先述した池が営まれる以前（12世紀前半）には池や湿地があったり、その西側には流路などもあった。12世紀前半頃の池は、南西方向に広がる大きなもので、第110次調査区付近は東端に位置し、その一部は手を加えられ泉殿の庭園として利用されたものと考える。そして、東殿に先述したような庭園が営まれるようになった契機は、安楽寿院の御堂造営であろう。特に、鳥羽上皇による塔（1139）や九体阿弥陀堂（1147）の造営がそれである。

東殿の庭園関係調査報告書

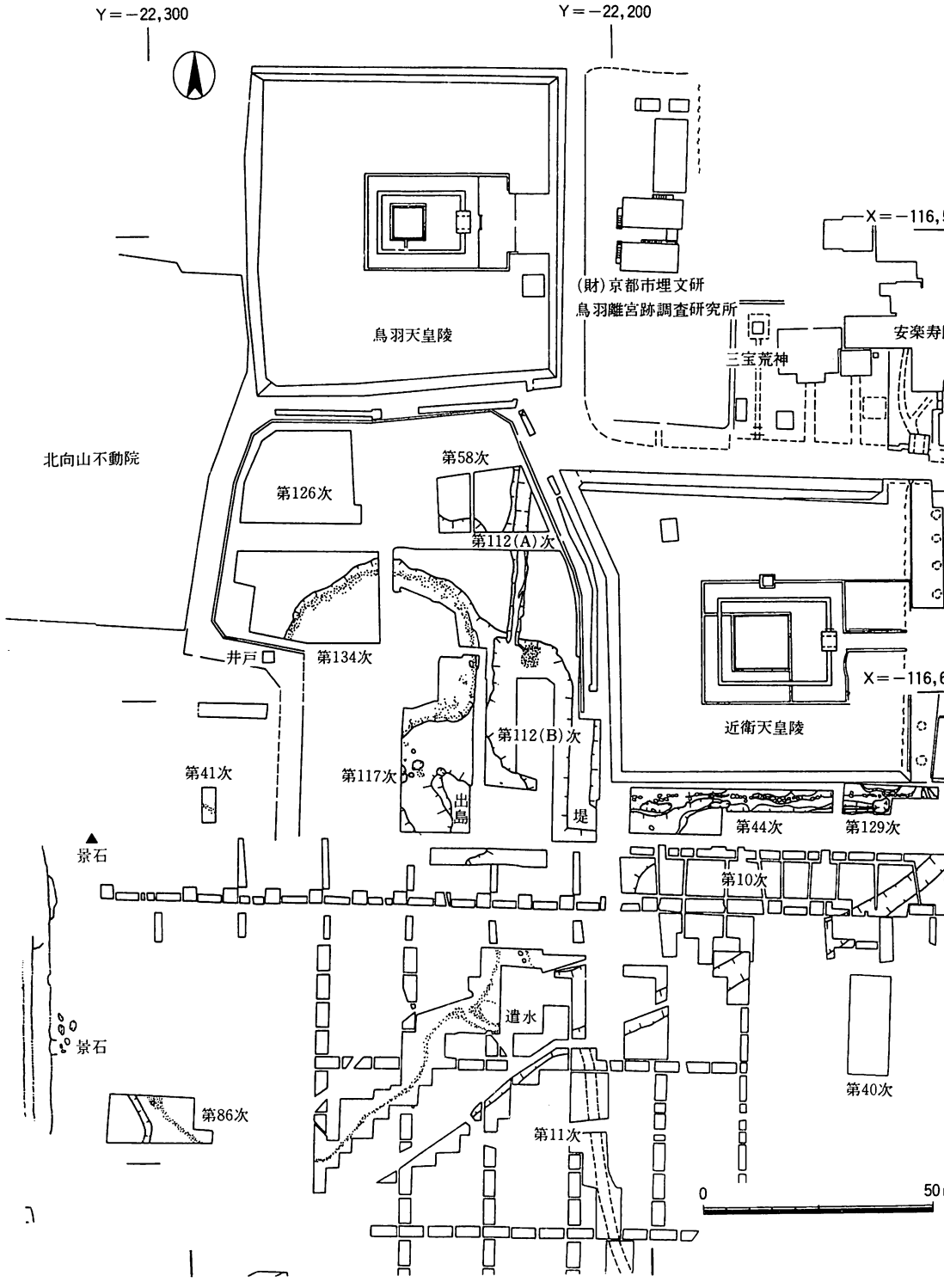
「鳥羽離宮跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1972年度　京都市文化観光局文化財保護課　昭和49年

「鳥羽離宮跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1973—II　京都市文化観光局文化財保護課　昭和50年
「第41—42次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要』昭和53年度　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　昭和54年
「第44次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要』昭和53年度　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　昭和54年
「第58次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　昭和56年
「第112次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和60年度　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　昭和61年
「工業第117次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報」昭利61年度　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　昭和62年
「II　第129次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和63年度　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成元年
「IV　第134次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』平成元度　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成２年

図　　版

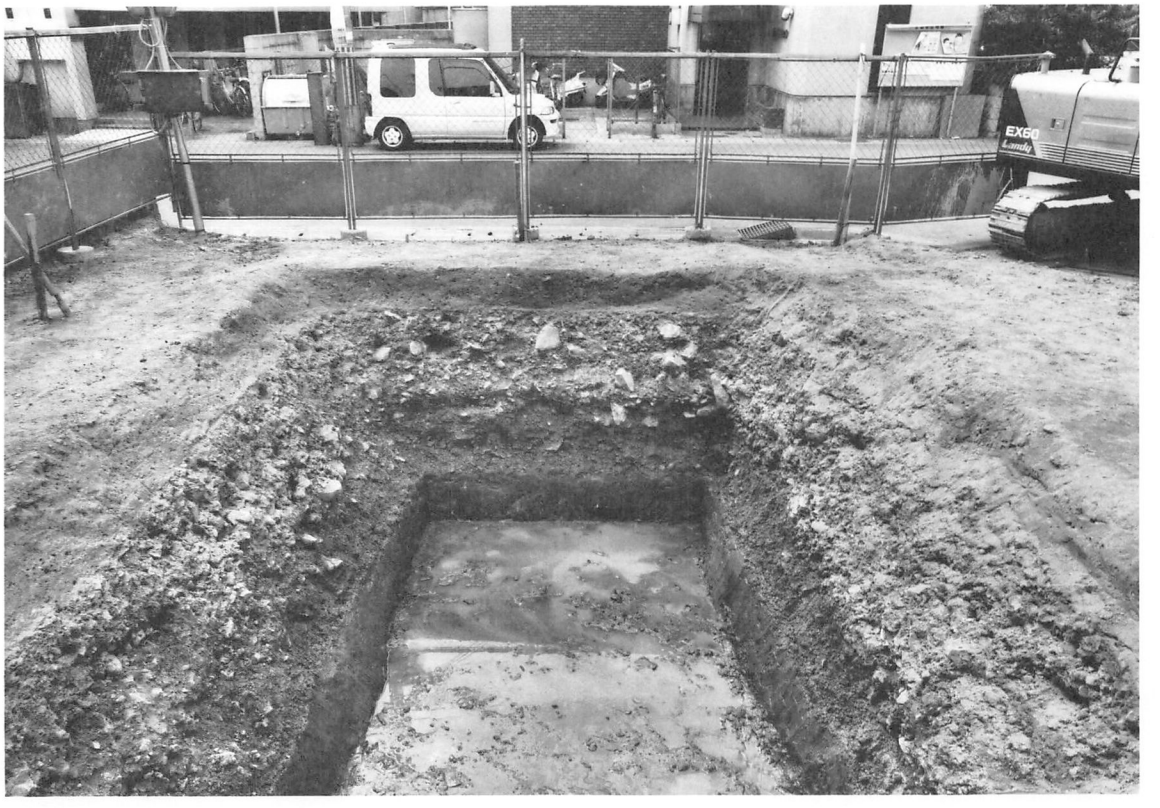

鳥羽作道
鴨川
名神高速道路京都南インターチェンジ
田中殿
東殿
鳥羽天皇陵
安楽寿院
近衛天皇陵
白河天皇陵
金剛心院
北殿
勝光明院
馬場殿
城南宮
秋ノ山
南殿
旧鴨川
0
400m

（1）鳥羽離宮跡全体図

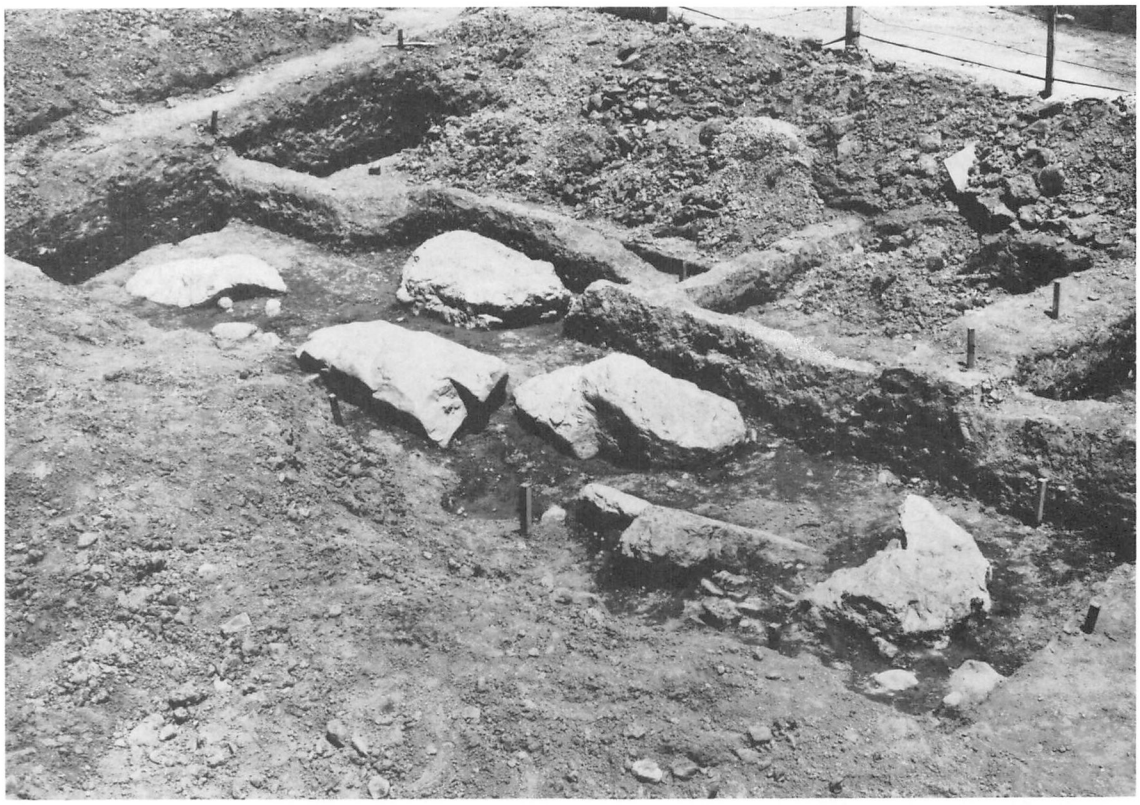


（2）東殿跡庭園遺構配置図

1　東殿航空写真（1978年３月撮影，南西から）



2　第139次調査区全景（東から）

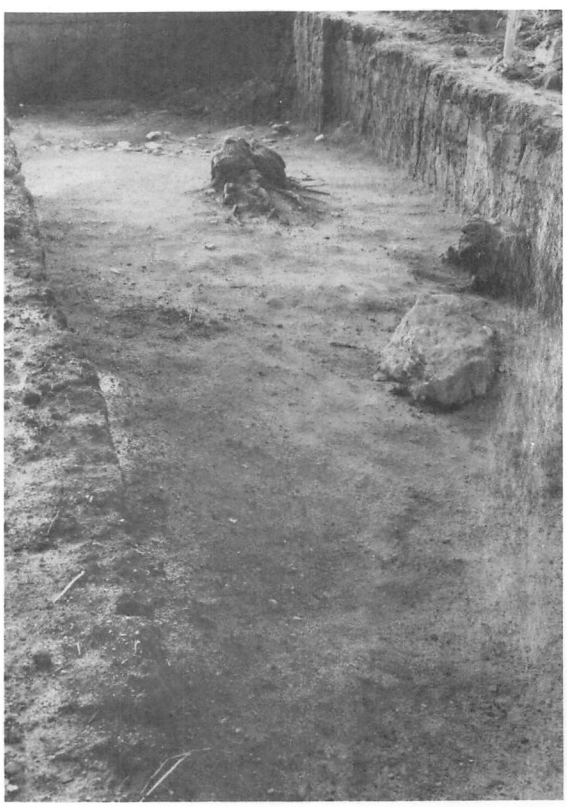


1　第10次調査　検出した景石（南西から）

2　第11次調査　3個並んだ景石と州浜（南西から）

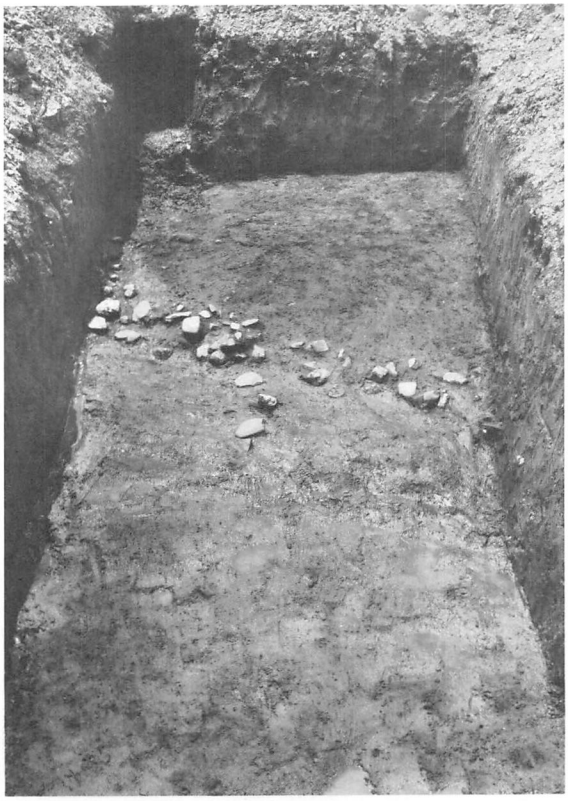
1　第11次調査　遺水の注ぎ口（北から）

2　第11次調査　遺水と出島の南端（北から）



3　第11次調査　出島南端の汀（東から）

1　第11次調査　洲浜の細部（西から）

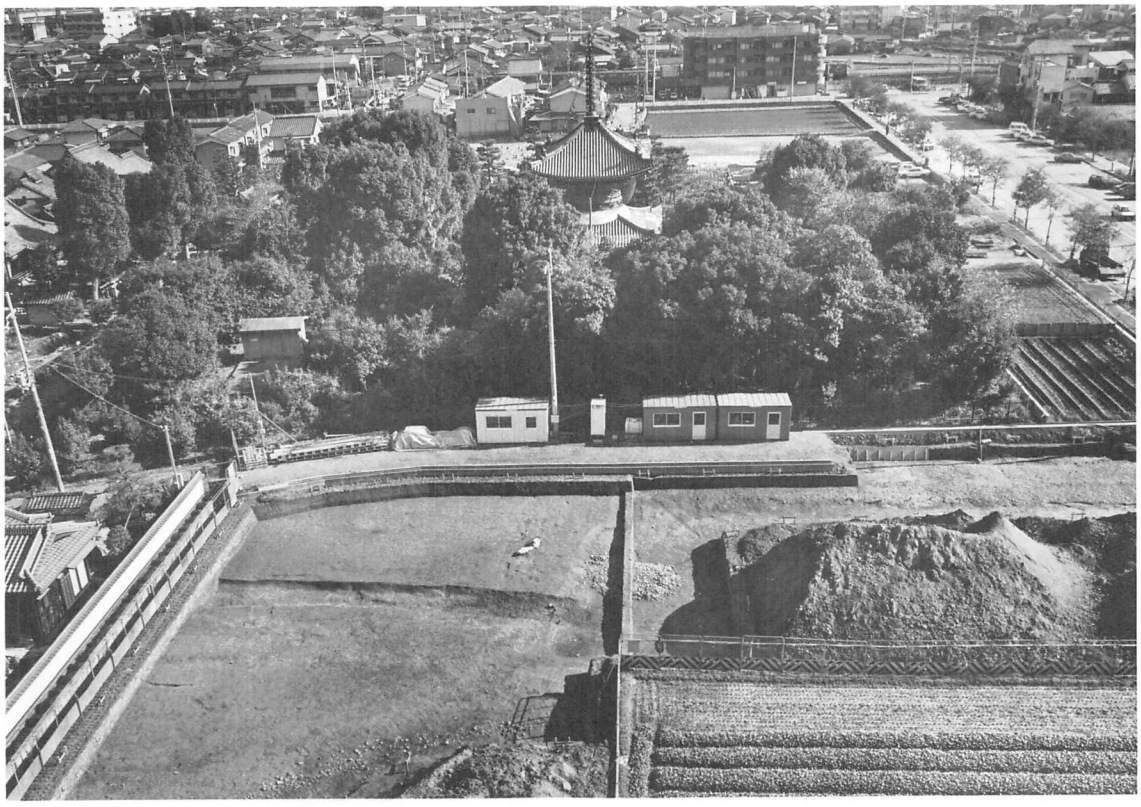


2　第41次調査　半島の洲浜（北から）

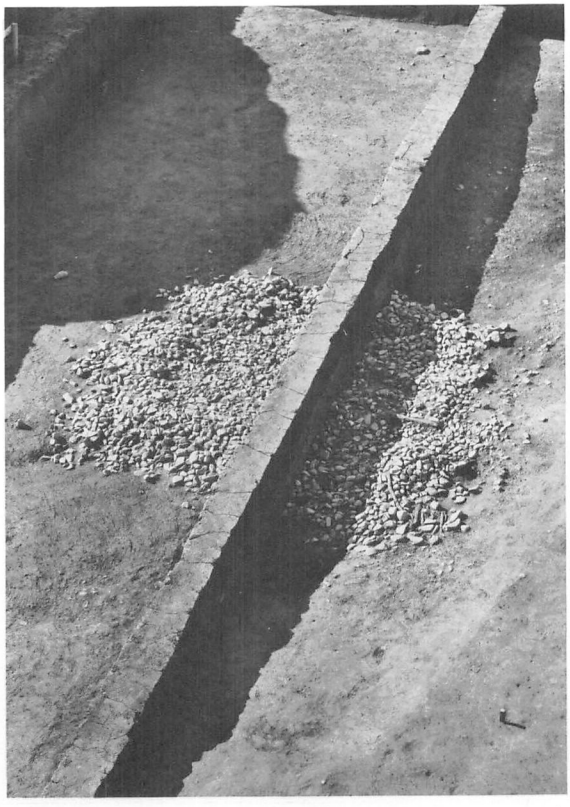
3　第44次調査　景石検出状況（西から）

1　第86次調査　汀の地業（北東から）

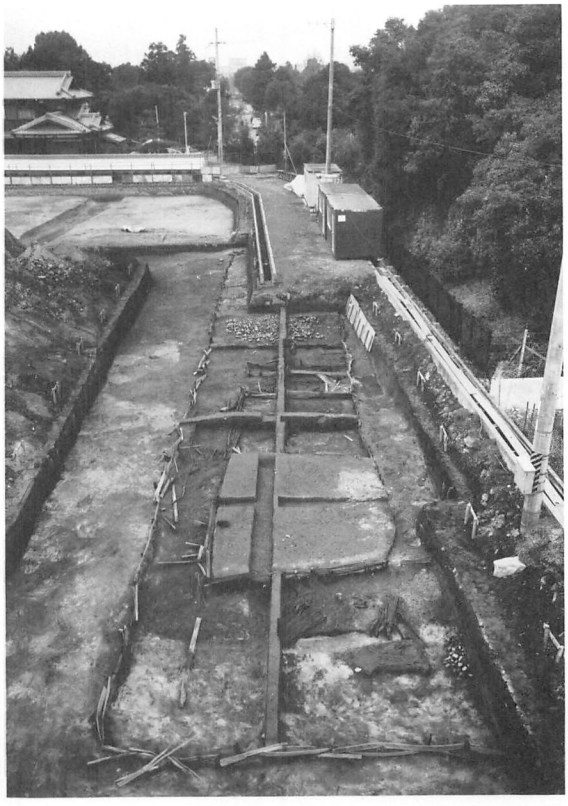
2　第86次調査　汀の洲浜と排水溝（東から）



1　第112(A)次調査　池北岸の状況（西から）

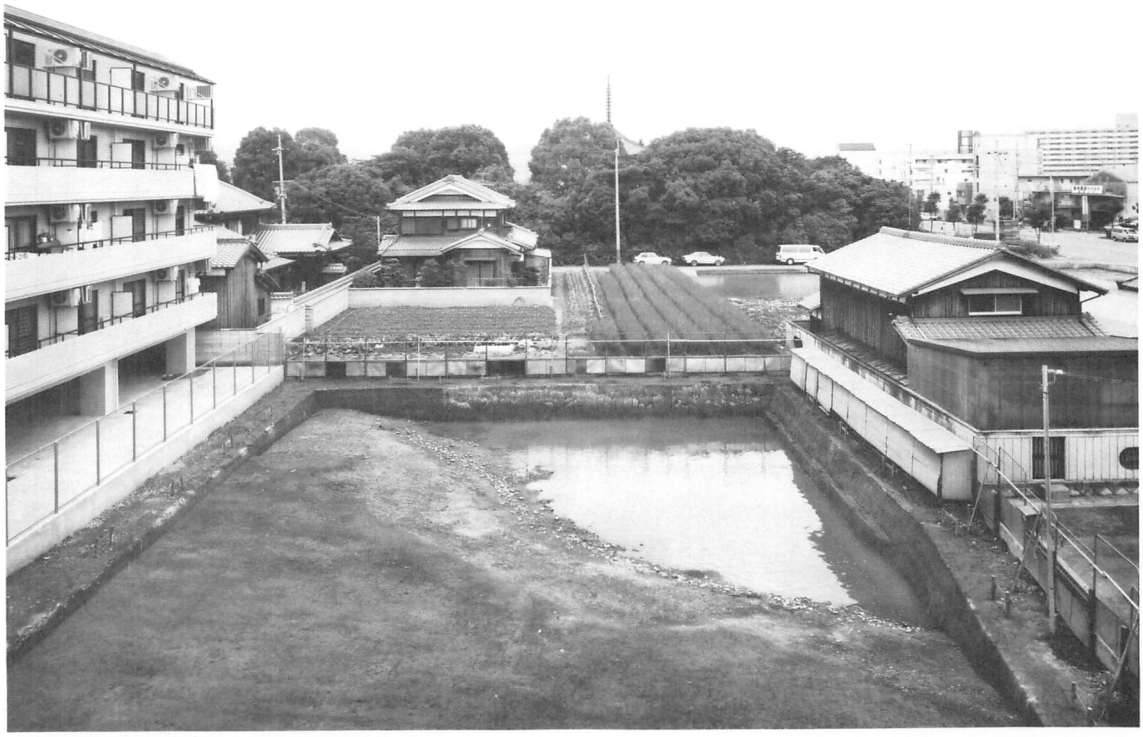


2　第112(A)次調査　集められた玉石（東から）



3　第112(A)次調査　近衛天皇陵南西の堤（南から）

1　第112(A)次調査　池北岸と南北溝（東から）



2　第134次調査　復元した水位（西から）

1　第112(B)次調査　出島東側の汀（北から）

2　第117次調査　出島西側の洲浜と景石（北東から）

鳥羽離宮跡発掘調査概報

平成５年度

発行日　平成６年３月31日

発　行　京都市文化観光局

住　所　京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川大宮東入元伊佐町265-1

TEL (075) 415-0521

印　刷　真　陽　社